

お客様

心おどる音楽が流れ、わたしたちの家族は、ショーが始まるときを待っている。

わたしは、両親にたのみこんでやっこの思いでこの遊園地へ連れてきてもらった。わたしが大好きなキャラクターが出演するショーがもうすぐ始まる。わたしは夢中で両親にキャラクターの話をし、ビデオカメラを用意して待った。

しばらくすると、ステージの前は混み始めた。どんどん人がやってきて、人と人の頭の間からのぞきこむか、背伸びをするかでないかステージを見ることができなくなってきた。わたしたちの後ろにも、たくさんの人たちがショーの始まりを待っている。花壇のフェンスや木に登って待つ人も出てきた。係の人がやってきて、

「危ないですから、花壇のフェンスや木に登らないでください。」
と、注意している。それから、

「ショーの間は、お子さんを肩車したり、ビデオやカメラを頭より上に持ち上げたりしないようにしてください。」

と何回も大きな声で呼びかけている。

周りの人たちは、

「そんなこと言ったって、これじゃあ、よく見えな
いし、写真もとれないぞ。」

と、不満げだ。

わたしも注意ばかりする係の人をこころよく思っ
ていなかった。

いよいよ、ショーの始まりだ。ところが、しばらく
くするとわたしたちの前に立っていた男の人が子ども
もを肩車かあし始めた。その子どものお母さんらしき人
が、

「やめなさいよ。さっき、注意があったでしょう。」
と、ばつが悪そうに言った。おかげでわたしはショー



がまったく見えなくなってしまうた。そこに、係の人がかけよってきた。

「お客様、肩車はおやめください。」

そのお父さんらしき男の人は、

「えっ、でも……、うちの子がよく見えないんですよ。」

と、答えた。

「危ないですし、後ろのお客様のご迷惑にもなりますので……。」

そう言われても、男の人は肩車から子どもを降ろそうとする気配はなかった。さらに、注意が続く。

「お客様。肩車はご遠慮いただきいております。すぐに降ろしてください。」

係の人の言葉で、ようやく肩車から子どもを降ろした。

しかし、男の人はむっとした顔で係の人に言った。

「納得できないものを、勝手にいろいろおしつけるのは



おかしいんじゃないですか。わたしたちはお金をはらって入場しているんです。お客様なんですよ。」
わたしが、その人の顔をびっくりにして見たとき、

「そうだ、そうだ。」

と、男の人に同調する声が出始めた。ショーは楽しい音楽に合わせて続いている。それなのに、わたしたちの周りは、いやな空気がただよっている。係の人は、少し赤い顔になって、

「申しわけございません。ご協力ありがとうございます。」

と頭を下げた。

(何か、変だ。)

と、わたしが思ったときだった。注意を聞かずに、こっそりステージの反対側にある木に登ってショーを見ていた人が、木から落ちたらしい。木の下には人だかりができて、さわぎになっていた。係の人は、急いでその木の方に走っていった。

そのさわぎがおさまったところに、ショーも終わった。多くの方は「楽しかったね。」と笑顔で帰りはじめた。でもわたしは気持ちが悪くないまま、その会場を後にした。

わたしはショーが始まる前の係の人の注意や、自分たちの周りで起こったことをもう一度考えていた。